福岡教育大学紀要，第40号，第4分冊，147－166（1991）

欧米派遣小学師範学科取調員の研究（二）

平　田　宗　史

（平成2年9月10日　受理）

(四)アメリカへ

いよいよ，アメリカへ向う出発の時が来た。1875（明治8）年7月8日，小学師範学科取調のため，米国派遣の命を受けた伊沢修二，高嶺秀夫，神津専三郎の3人は，出発前日の7月17日までに横浜の糸屋と云う飛脚船問屋に集合した。[1] 同じ船で留学する文部省第一期留学生のつぎの11名も集合した。

法学　三浦和夫　小村寿太郎
　　菊池武夫　斎藤修一郎
理学　松井直吉　長谷川芳之助　南部久吾
工学　原口　要　平井晴太郎
以上米国留学
諸芸学　古市造次（公威）
以上仏国留学
鉱山学　安藤清人
以上独国留学[2]

小学師範学科取調員3人と文部省第一期留学生11人と彼等の監督官である目賀田種太郎と目賀田の妹君緑の16名が，文部大輔田中不二麿主催の横浜海岸通のグランドホテルでの送別の宴に招かれる。送別の宴は，午後7時半開宴，そして，「第九時退散，直に糸屋に至り，ハシケに乗て蒸気船に達す。時に夜第十字半比なり。月光皎々として清風銀波を動し，故国を去るの情と西洋に遊ぶの悦と一時に胸裏に迫る」と，高峰秀夫は，彼の留学生日記の中に，心情を記している。[1] 高峰以外の留学生も，故国を離れる淋さと外国へ遊学する不安と期待の情が混じり，なんとも言えない心境であったろう。今日の留学生と異なり，情報量も少ない上に日本の将来の運命を一身に背負わされた留学生の心境は複雑なものであったであろう。

1875（明治8）年7月18日の早朝（三浦の日記は，「明朝第五時出帆なり」[3]，高峰の日記は，「朝六字横濱出帆」[1]，伊沢の日記は，「朝八時　横浜湾解纜」[4]とある。）留学生の乗った太平洋郵船会社所有の北京丸（シチー・オブ・ペキン）は，横浜港を静かに出航した。その時は，「天気快晴舟行甚穏」であった[1]と，高峰は記し，伊沢も，「此日は天晴れ波穏にして富士の嶺も麗に見え景色いはん方なし一洋婦富士の真景を描きたり」[4]と，記している。

北京丸は，「近比落成して今回即ち第二度の行なり」[1]と言われる新造船である。その船を，三浦は，つぎのように説明している。

「その長さ七十一間，その幅七間，その深さ六間，積量五百噸，上等客百五十人，下等客千五百人を収容し得べし，一室に二人を容れ，各室に何れも寝臺二つあり，鐘あり，また人若し酒を酌まんと欲すれば長髪の僕その聲に應じて入り來たる。更に，食堂あり，書斎あり，また浴室あり，實に至便を極む。」[5]

伊沢は，別の角度から，乗船した船をつぎのように述べている。

「其長さ七十間余　幅十間余にて三の烟突と四の帆柱を具へ機械は螺旋機関なり船中居室の飾付なども誠に美々しく少しも不自由なる事なし」[4]

伊沢と高峰は，上等第十一番の同室であるが，神津は誰れと同室であったか不明である。それはさて置き，留学生の中で一番若い三浦は，早速，ショックを受ける。その様子を，出航日の7月18日の日記の中で，つぎのように記している。

「船中には，長髪の僕頗る多きを見て私かに驚く，その人たる素衣にして汚穢を極めたるものなり，白人の指揮によりて或ひは掃除し，或ひは帆を揚げ，なほ便所の掃除から盥漱の水，食事の給仕に至るまで一として彼等の手にかゝらざるものなし。嗚呼彼等や往昔は世界中肩を並ぶるものなかりしに，哀れ人奴となり辛ふじて世を過ごす，これ果して天命か将た己れが驕慢尊大にして他國を指して夷狄と稱し，是と交際を發かず以て自ら足れりと為し，怠惰に陥いるの為すところか，噫。」[6]

三浦より二才年長の高峰は，7月26日の日記の中で，同じようなことを，別の角度からつぎの

ように記している。

「船中の有様を見るに，船将及び他の士官・器械士等は皆西洋米國の人にして水夫・火夫の如きは悉皆東洋支那の人なり。其の使役せられて奔走し飲食を貪ること豚の如く，狡猾なること狐の如く，不潔なること乞児の如くなるを見れば，東洋の人民無智にして西洋人の為に力役に陋り永く奴僕視せらるゝこと實に慨嘆に堪へざることなり。苟も東洋の人民たるもの如何ぞ憤励してこの耻を洗はざるべけんや。」(7)

日記を見ると，先ず船の装備のすばらしさに驚き，そして，さらに，西洋人が重要なところを占め，その小間使となっているのは東洋人であるという現実を見せられたことに，若い二人は，驚かされるとともに，新なる決意をさせられたのである。このような心境になったのは，三浦，高峰二人だけでなく，他の留学生も，多かれ少なかれ同じような心持ちになったものと推察される。

つぎに，留学生たちが関心をもったものは，日曜日の礼拝である。出航日の時も日曜日であったけれども，出発時のあわただしさの中で，礼拝に気づかなかったのか，日記の中に，そのことは記されていない。しかし，一週間後の7月25日の日曜日の礼拝については，高峰は，つぎのように記している。

「朝天気晴朗，涼風東南より来る。夏日の炎熱を覺えず，出帆以来最上の快日なり，朝十字過，鐘を鳴し人を集めて老僧説教をなす。耶蘇教の信徒英米の男女十餘人ソーシャルホールに會して敬神の禮をなす。船中には佛の旅人も許多あれども，行かず。英語にて説教するを以ての故か，将た他の故あるか。余等日本人同行十六人の中獨り神津氏のみ耶蘇の信徒なるを以て，拝禮の席に列し，敬神・愛神・信神の道を修めらる。其餘は皆傍看して，咲ふものあり，誹るものあり，戯謔するものあり，論駁するものあり，如比不信の徒のみ多くしては直に上天の怒に逢ひ死して地獄に落るどころか生きて大洋に溺るゝも知る可からず。」(8)

伊沢も，簡単であるが，日曜日の礼拝の様を，つぎのように，記している。

「風頗る穏にして航行亦平なり航程二百七十二里　季候六十七度　此日は日曜にあたりければ洋人等は朝より書院にて礼拝を始め奏楽説教等いと賑しかりし曽て博物新編にて洋中には鹹光とて塩の光ることありと聞つるが実に其物のありける事を知れり」(9)

高峰と伊沢が，日記の中で，日曜礼拝について関心を抱いたのは，同じ留学生の神津専三郎が礼拝に参加していたことだけではないであろう。

その後，風雨の激しい日，逆風の日があったけれども，北京丸は，順調に航行し，横浜港を出発して19日目の8月15日にサンフランシスコに到着した。高峰は，「サンフランシスコ　に着し，一行上陸す。」(10)としか記してないが，伊沢は，その時の様子を，つぎのように記している。

「朝　霧深し　後晴　航程百九十二里にて午時桑港着船　此日暁より桑港を距る二十里余の一島にある燈台の光を見始め明方に至りて亜米利加の海岸を見出したり，満船の喜一方ならず，恰も閣龍子（ごろんぶす）米国発見の時のごとく皆亜米利加々々々々と号びたり，しばらくして船金門（金門とは地名也）の口に入れば両岸の山々霧の中に出没して恰も画る山水のごとし，唯恨むらくは，此辺の山々は皆兀山ばかりにて草木なければ其景色美なりといへども趣を欠くものの如し，午後十二時過グランドホテル館に泊り込む

横浜より米国サンフランシスコ迄海上四千七百五十七里」(11)

三浦は，伊沢と異なって，サンフランシスコ到着の様子を，つぎのように記している。

「朝第六時金門を入り，凡一時間にして陸地と咫尺の間に在りと雖も汐低くして上陸する能はず，十二時半まで空しく潮の満つるを待つ。

波址場には運上所の役人来たりて荷物を開き點検す，終って馬車に乗りグランド・ホテルに往く。

桑港の山は恰も焼山の如く，その市街は大火の後の如く，塵芥甚だ多くして市中を徘徊するには眼鏡を必要とせり。気候は通例六十度にて米國中最上の地なり。この地は日本を出てより初めて見たる市街なるの故を以てか，後に至るまで大いに美麗の印象を残す。(12)

サンフランシスコに2泊し，8月7日の午前8時，ニューヨーク行の汽車に乗る。8月12日にシカゴ，14日の夜，ニューヨークに到着した。

三人の小学師範学科取調員の中，伊沢は，8月5日のサンフランシスコから父あての手紙の中で，「当月中旬には『セーレム』着の筈に付」(11)と報告したが，予定の行動を変更しなければならないことが生じた。そのことの詳細について，彼は8月22日付の手紙の中で，つぎのように報告している。

「去る十四日紐育府に着夫よりボストン府に趣き教育事務局書記官に謁しセーレム師範学校に

入学之儀照会候処当校は女生徒而己に付ブリッヂ，ウヲートル師範学校に入学可然様懇諭いたし呉候に付来月七日よりブリッヂウヲートルに趣く事に決定いたし候[13]」

また，別の便りで，「兼而申上候セレーム師範学校の儀は女生徒のみ入学相許す規則に付ブリッヂウヲートル師範学校へ入学可然教育局書記官ジャクソン氏申聞候に付即其段電信を以て文部へ伺出候処五日間に允許の電報到来いたし[14]」と，報告しているように，彼が留学しようとしたセーレム師範学校（Salem Normal School）は女子のみ入学出来る師範学校であったので，1840年9月9日設立のブリッジウォーター師範学校（Bridgewater Normal School）へ，予定変更して，留学しなければならなくなった。

セレーム師範学校は，1854年9月13日設立され，女子のみ入学を許していたのに，日本の文部省は何故に，伊沢をセレーム師範学校へ入学させようとしたのか。それが分らない。

そのようなトラブルがあったにかかわらず，伊沢は，「紐育府にてセントラルパークと云ふ公園に罷越珍禽異獣等（虎・豹・獅子・象・風鳥（ママ），其他種々を実物に見たり先珍談は二年之後拝眉を得て万々縷述可仕候只驚くべきは物価の高値に御坐候[15]」と，ニューヨークの様子を父に報告している。行き先が決まった便りとは言え，彼の精神力は逞しい。

ニューヨークに2泊して，8月16日，三人は，同行の開成学校留学生達と別れ，ニューヨーク州首府オルバニーに行き，そこで，三人は別れ，伊沢は，ブリッヂウオーター師範学校，高峰は，オスウエーゴー師範学校，神津はオルバニー師範学校へと向った。

(注)

(1) 高嶺秀夫先生記念事業会 『高嶺秀夫先生傳』 培風館　大正10年12月20日　33～34頁。
(2) 鳩山春子編 『鳩山の一生』 昭和4年10月10日　20～21頁。
(3) 同上書　436頁。
(4) 信濃教育会編 『伊沢修二選集』 信濃教育会　昭和33年7月15日　962頁。
(5) 前掲書 『鳩山の一生』 437～438頁。
(6) 同上書　438頁。
(7) 前掲書 『高嶺秀夫先生傳』 36頁。
(8) 同上書　35頁。
(9) 前掲書 『伊沢修二選集』 963頁。
(10) 前掲書 『高嶺秀夫先生傳』 37頁。
(11) 前掲書 『伊沢修二選集』 964頁。
(12) 前掲書 『鳩山の一生』 440～441頁。
(13) 前掲書 『伊沢修二選集』 1018頁。
(14) 同上書　1019頁。
(15) 同上書　1018～19頁。

(五) 1875年ごろのアメリカ合衆国の教員養成

コロンブスが，1492年，アメリカを発見し，17世紀初めから18世紀にかけて，ヨーロッパから，移民の群れが潮の流れのように，アメリカに渡ってきた。その中心となったのは，イギリス人であった。1680年以降は，イギリス人ばかりでなく，ドイツ，アイルランド，スコットランド，スイス，フランスなどからも，いろいろな理由で大勢の移民が来るようになった。1690年には，アメリカの人口は約25万人に達し，1775年に250万人を超えるにいたるまで，25年毎に2倍ずつ増した。

親が子どもの幸福を願って子どもの教育を考えるのは，自然の情である。したがって，アメリカの先住民のインディアンにおいても，子弟の教育が行われていたと考えても的をはずれていないであろう。

しかし，意図的，組織的教育が実施されるようになるのは，新しく，アメリカに移住して来たイギリス人を中心とした白人の手によってである。

通説によれば，1620年，信仰の自由を求めて，新大陸ニューイングランドに移住して来た清教徒（Puritan）が，神の王国である「聖書共和国」(Bible Commonwealth)実現のために，子どもの教育を行なったことに始まると，言われている。

そして，清教徒は，1635年に，大学予備校のボストン・ラテン語学校，翌36年には，指導者養成のための，アメリカ最初の高等教育機関であるハーヴァード・カレッジを創設した。

さらに，聖書共和国の実現を図ったマサチューセッツの植民地の指導者は，1642年，世界最初の義務教育令を制定した。そこでは，児童をして読み方・宗教等の教育を受けさせることを父母の義務とした。そして，1647年の教育法では，それを強化するため，50戸以上の処では初等学校で教える教師を雇うことを義務とし，100戸以上のところでは，ラテン語学校の設置を命じた。

しかし，マサチューセッツ地方以外では，教育を各宗派に委ねたり，教育はあくまで個人的な経済力によって対処すべき私事にすぎないと考えていた南部諸州においては，公教育の早急な発達を望むことが出来なかった。すなわち，個々別々に，慈善的に行なわれる程度であった。

1776年，アメリカが独立した後も，アメリカの教育は，暗黒の時代，どん底の時代と言われているように，独立前と余り変わりなかった。しかしながら，18世紀末から起った各種の汎愛的運動，宗教団体の活動，助教法の採用等によって，19世紀になると，コモン・スクール運動が抬頭してきた。すなわち，公立の初等学校を設置し，全ての児童に自由と平等の教育を与えようとした。この運動の目標達成には，紆余曲折があったが，1792年，ニューハンプシャー州が，憲法によって，宗教と教育とを分離し，ペンシルヴァニア州が，1834年，無月謝教育制度を実施し，そして，マサチューセッツ州が，1852年，法改正によって，「八歳から一四歳までの子どもを監督している人は誰でも，少なくとも一二週間，彼が住んでいる町あるいは市の中の公立学校へ，その子どもたちを就学させるべきである。」[1]と，就学義務規定をした。これによって，近代初等教育の三大原則である世俗性，無償性，義務性の原則が確立され，他の州でも，マサチューセッツ州にならうところが出て来るが，義務教育制度が成立するのは，20世紀初等までかかった。

以上のように，植民地時代のアメリカは，民衆教育にほとんど関心がないのと同じように，教師教育に対しても，関心がなかった。すなわち，読み，書き，そろばん（算数）の3R'Sが出来，聖書の読める者なら，小学校教師として採用された。しかし，フランクリン（Franklin, B 1706～1790）の提案で，フィラデルフィア市に，フランクリンス・アカデミイが，1751年に設立されると，教師教育の流れが変わる。アカデミイは，カレッヂ入学の準備だけを目的とするラテン文法学校よりも，もっと，実用的，実際的中等教育の要求から設立されたものである。このアカデミイの入学資格は，初等教育修了者で，8歳以上16歳までで，就学年限を6年とし，教えられる教科科目は，ラテン語，ギリシャ語，英語，フランス語，ドイツ語ならびに歴史，地理，年代学，論理学，修辞学また書き方，算術，商業算術，幾何，代数，測量術，計量法，航海術，天文学，遠近画法，その他数学的諸学科および物理学，機械原理等である。授業料は，年4ポンド，入学金は20シリングとする。[2]

フランクリンの提案で設立されたアカデミイは，18世紀末には，全国に及び，1820年頃になると中等教育をほとんど独占したと言われている。[3] イングリス（Ingli's, Alexander James. 1879～1924）によると，1850年のアカデミイの数は，ニューイングランド諸州，1,007校，中部大西洋岸諸州，1,636校，南部諸州，2,640校，ミシシッピー上流諸州753校，その他の州に49校，合計6,085校である。アカデミイの多くは私立で，ケンタッキー，インデアナ州などでは，郡立のアカデミイを設立したところもあった。修学年限は4年制が一般的となり，学科目は，英語，英文学，歴史，地理，算術，幾何，代数，天文，植物，物理，化学，測量術，哲学，演説法，討論法等であると言われ，アメリカで発達したアカデミイの特色を，阿部重孝は，つぎのように指摘している。[4]

（1） 大学入学準備の学科以外に，社会生活の準備を与へる学科－英語・数学・自然科学を力説したこと。
（2） その生徒を直接小学校からとったこと。
（3） 小学校に対して当時最良の教員を供給したこと。
（4） 一宗一派に偏せざりしこと。
（5） 中等教育を女子に開放したこと。

以上の指摘の中で教師教育において重要なことは，（3）の「小学校に対して当時最良の教員を供給したこと」という指摘である。すなわち，アカデミイが，教師教育機関となっていたことである。

ところが，ここで注意しなければならないこと

は，19世紀初頭までは，小学校の上級学校であるアカデミイの学科目を修得するだけで，小学校教員となることが出来たが，アカデミイの一般的教科の外に，少しの教職科目を教授して，小学校教師を養成しようとするものが登場した。

その私的な試みが，ホール（Hall Samuel R.,1795～1877）によってなされた。彼は，1823年にバーモント州のコンコードで，「当時の典型的なアカデミーの学習内容に，彼が教授法（art of teaching）と呼んだ新しい学習を付加した」教師教育を開始した。(5)

ニューヨーク州は，1835年，私立学校であるアカデミーに，公費補助を与えて，教員養成科を付設し，小学校教員を養成しようという方式が採用された。公費補助を与えて，既存の施設および設備を利用し，カレッジに進学しようとする学生に授けられる同じ教科内容の上に，「教授の原理」（Principles of teaching）を付加する程度のものである。『初等学校教員養成計画』（1835年1月8日）によると，州内八つの上院議員選挙区ごとに一校のアカデミーに養成科を付設し，修業年限を最低3年間とし，つぎのような教科が教えられた。

㈠ 英語，㈡ 書方・図形，㈢ 暗算・筆算，㈣ 地理・一般史，㈤ 合衆国史，㈥ 幾何・三角・求積・測量，㈦ 物理学・天文学の初歩，㈧ 化学・鉱物学，㈨ 合衆国およびニューヨーク州の憲法，㈩ 教育法規および公務員職務の要点，㈠㈠ 道徳哲学および知識哲学，㈠㈡ 教授の原理

教職関係以外の教科は，「アカデミーの一般の生徒と一緒に授業を受けるべきであり，養成科の授業は一般課程のアカデミックな授業と何ら異なるものではない」ことを原則とし，附属学校（実験学校）を設けなかった。(6) 教育実習は，休暇中，地方の冬季学校で，アルバイトを兼ねて，行なわれるのであった。

州教育長の要請で，実施後5年のアカデミーの養成科を視察したポッター（Potter, Alonzo 1800～1865）の報告書によるとアカデミーの養成科の生徒は，初等教科の学習を軽視し，より高度な学科を勉学するのに熱心であり，3年の修業年限の三分の一程度しか在学しなく，教育実習も怠っており，教職についても長く留まる意思がないと言う。したがって，彼は，養成科の修業年限を1年半ないし2年に短縮し，2学期以上在学した者には，最低8ヵ月，初等学校に就職することを義務づけるよう提案している。(7)

さらに，彼は，プロイセンやフランスと同じように，公費で維持され，生徒の大部分の授業料と寄宿料を無償とし，教科の学習と実験学校での実習を1年ですませ，卒業後，一定期間，教職につかせる師範学校を州都の近くに設置するよう提案している。(7)

師範学校を設置するという考えは，ポッター独自のものではない。オルムステッド（Olmsted, Denison 1791～1859）は，1816年，「教員養成所」（Seminary for School Master）の設置を提案した。それは，州の費用で設立維持され，授業料が無償で，修業年限1～2年であり，各教科とともに，その教科の教授方法，および学校の組織と管理なども教授する教員養成機関である。1820年代になると，種々の教員養成論が提案されるが，その中で代表的なものは，カーター（Carter James Gordon 1795～1847）が，1825年2月のボストン・パトリアット（The Boston Patriot）誌上に載せた『教員養成学校の概要』の論稿である。教職経験を有するカーターは，コモン・スクール発展を抑止している原因の一つとして，無能力な教師にあるとし，その養成を目的とする学校の設置を提案したのである。それは，教員養成を目的とし，州立であり，無月謝で，教職教養を重視し，附属学校（実験学校）と適切な図書館を有し，各学科（部門）ごとに，一名の教授と助教授を配属しようとするものである。(8)

1830年代になると，カーターの案は実現へと向っていく。それはマサチューセッツ州においてであった。カーターは，1835年に州議会に進出し，1837年に，彼の提案で州教育委員会が設置され，ホレーマ・マン（Mann Horace 1796～1859）が，その初代教育長に任命される。二人は，教育行政の立場から，師範学校設立を推進するのであるが，その早期実現には，他の二人の協力者なしには，出来なかった。その一人は，フランス人のクーザンを通じてプロイセンの師範学校に感銘し，その設立に情熱を燃し，民衆へ宣伝講演したブルックス（Brooks Charles 1795～1872）であり，他の一人は物心両面で師範学校設立を助けたボストンの豪商ドワイト（Dwight Edmund 1780～1849）である。

教員養成所の設立はスムーズに進まなかったが，ドワイトの一万ドルの寄付申し込みにより，一転，進展し，1838年4月19日，州知事によって承認された。

そして，1839年7月3日，レキシントンにアメリカ最初の師範学校である女子師範学校，つづいて，同年9月4日，バリに男女共学の師範学校，

翌年9月9日，ブリジウオーターに男女共学の師範学校が設立された。

レキシントン師範学校が設立される以前は，教員養成機関の名称は，プロシアのLehrerseminarを直訳してTeacher's SeminaryまたはSeminary for Shool Mastersを使用したり，アカデミーの教員養成科についてはTeacher's Academy, または，Academy for Shool Mastersという用語を使用していた。それが，1838年6月1日，師範学校（Normal Shool）と呼称することに，州教育委員会で決定したと言う。そして，1845年には，State Normal Schoolと変更された。

Normal Schoolというのは，フランス語のécole normaleの英語訳であるが，この言葉を採用するに至ったのは，つぎの理由からである。

「一つには，それがヨーロッパにおいて同じような教育機関を呼ぶのにすでに使用されていること。

二つには，他の教育機関と混同されることが防がれること。

三つには，短かく使用に便利であること。」

以上の三つの理由を挙げているが，ノーマル・スクールの「ノマル」とは，ラテン語の「Norm」に由来し，「規則，標準，法則」を意味するのである。師範学校設立に中心的役割を果した一人であるマンは「ノーマル・スクールは，そこで，教育の各種の部門についてのガイダンスと指導に関する実践と原理の法則が教授される学校を表示している」と言う。(9)

アメリカ合衆国の最初の師範学校であるレキシントン師範学校の初代校長にパース（Peirce, Cyrus 1790～1860）が，1839年6月21日，任命された。その約4ヵ月前の2月27日に，生徒募集の告示が出されていた。それによると，「レキシントンの地に，コモン・スクールに勤務を希望する女性教師の資質向上のための師範学校を設置する予定である。」とし，そこへの入学志望者の入学条件をつぎのように示した。

「16歳に達していること。身体強健であること。師範学校での学科課程を終了した後は，学校教師になる意思のあることを宣誓すること。予備試験を受けて，綴り，書き，英語，文法，地理，算術に十分精通していることを証明すること。すぐれた知的能力，および，高い道徳的性格と原理とをもっていることの満足のいく証拠を示すこと。」

そして，在学年限を1ヵ年以上とし，全課程を修了するには，恐らく，3ヵ年を要するであろうと記し，入学者は，授業料を無償とするが，食費，教科書費などを支払わなければならないとした。(10)

以上のような内容の生徒募集告示に応じて，7月3日の開校式の日に，僅か3名の入学志願者がやってきた。初代校長パースは，睡眠時間4時間という寝食を忘れた八面六臂の活躍で，レキシントン師範学校の教育を実践した。実験開始1年半後のパースの報告によると，校舎は，横50フィート，奥行40フィートの2階建で，地下を台所，食堂，洗面所，貯蔵室などにあて，一階はモデル・スクールとした教室一つと応接室，管理者寝室，寄宿室，二階は教室一つと五つの寄宿室にあて，そして，屋根裏に四つの寄宿室を設けていた。教師は校長であるパース一人である。1年半の間に在学した学生は41人であるが，学生が最も多い時は34人である。

学生は，寄宿料（週二ドル），臨時の負担となる燃料費，洗濯費などを支払い，授業料は無償である。学科課程は，コモン・スクールの全教科を詳しく十分に学習させた上に，作文，幾何，代数，自然哲学，知的哲学，道徳哲学，博物学，動物学，政治経済，簿記，声学，そして教授法を教えるのである。

モデル・スクール（付属学校）はタウン内の6才から10才の男女の児童の中から無差別に選ばれた30名からなる。臨時の出費は児童に負担させるが授業料は無償である。その全般的な管理は校長にあり，直接の世話は，師範学校の生徒が1ヵ月ごとの交代で，一人が監督者として，二人が補助者として行なうのである。

師範学校生徒の日課は，午前8時に開始し，12時に終り，そして，1時間の休憩ののち，午後1時に再開し，5時に終る。出欠が厳しく，遅刻や欠席のときは，校長の納得のいくような理由を提示しなければならず，授業中の私語も禁止され，外出希望の折は，校長に申し出なければならなかった。その他，必要な図書や教具の自弁，日曜日の一般礼拝出席，朝食前の1時間，授業終了後から夕食まで，夕食後の2時間半などの時間においては，体育，レクリェーション，社交などにあて，夜9時までの，それ以外の時間は，読書，自習，学校の業務などにあてるよう定めていた。

前学期末になると，4～5名の学生が教職につくため退校したが，その時，試験も儀式も免許状交付もなされなかった。(11)

以上は，レキシントン師範学校が開校し，軌道に乗った開校1年半ごろの校長の報告であるが，

表（五—①）州立師範学校の設立状況（南北戦争時ごろまで）

州	開設場所	設立決定年代	開校（移転）年月日	初代校長	備考
マサチューセッツ (Massachusetts)	レキシントン (Lexington)	1838	1839・7・3	Cyrus W. Peirce	女子
	↓		↓		
	ウエスト・ニュートン (West Newton)		1844・9(移転)	〃	
	↓		↓		
	フラミンダム (Framingham)		1853・12・15(移転)	Eben Stearns	
	バリ (Barre)	1838	1839・9・4	S.P.Newman	男子
	↓		↓		
	ウエストフィールド (Westfield)		1844・9・4(移転)	D.S.Rowe	
	ブリッジウォーター (Bridgewater)	1838	1840・9・9	Nicholas Tillinghast	
	セーラム (Salem)	1853	1854・9・13	Richard Edwards	女子
ニューヨーク (New York)	オルバニー (Albany)	1844	1844・12・18	David Perkings Page	
	オスウィーゴ (Oswego)	1861	1861・5・1	E.A. Sheldon	
コネチカット (Connecticut)	ニューブリテン (New Britain)	1849	1850・5・15	Henry Barnard	
ミシガン (Michigan)	イプシランティー (Ypsilanti)	1849	1853・3・29	Adonijah S. Welch	
ロード・アイランド (Rhode Island)	プロビデンス (Providence)	1854	1854・5・29	Dana P.Colburn	小野によると，1852年ブリストルに開校
ニュー・ジァージー (New Jersey)	トレントン (Trenton)	1855	1855・10・1	William F. Phelps	小野による。p401
	ベバリー (Beverly)	1856	1856		
イリノイ (Illinois)	ブルーミングトン (Bloomington)	1857	1857・10・5	Charles E. Hovey	
	↓				
	ノーマル (Normal)				

ペンシルヴァニア (Pennsylvania)	ミラズヴィル (Millersville)	1857	1859・12	James P. Wickersham	
	エディンバラ (Edinboro)	1860	1861		
	マンスフィールド (Mansfield)	1862	1862		
ミネソタ (Minnesota)	ウィノウナ (Winona)	1858	1860・9・3	John Ogden	
サウスカロライナ (South Carolina)	チャールストン (Charleston)	1857	1859		
ルイジアナ (Louisiana)	ニューオーリンズ (New Oriens)	1858	1859		
カリフォルニア (California)	サンフランシスコ (San Francisco)	1862	1862		
ウイスコンシン (Wisconsin)	マディソン (Madison)	1862	1863		
カンサス (Kansas)	エムポリア (Emporia)	1864	1865		
メイン (Maine)	ファーミントン (Farmington)	1864	1864		
	カスティーン (Castine)	1864	1867		
メリーランド (Maryland)	ボルディモア (Boltimore)	1865	1866		

注 (1) 主に，Harpen Charles A, A Century of Public Teacher Education, A Department of The National Education Association, 1939, P8 による。
(2) 小野次男著『アメリカ教師養成史序説』啓明出版昭和 51 年などによって補筆した。

注目すべきことはつぎの点である。

一つは，州立の小学校教員養成を目的とし，授業料無償の学校であること。

二つは，先ず，コモン・スクール（小学校）の全教科を学習させ，その上に，普通教科および教授法を教えていること。

三つは，モデル・スクール（附属学校）を附設し，理論と実践との統合をしようとしていること。

四つは，校長パースが牧師経験者であったためか，日常の生活での規律を重視していること。

レキシントン師範学校は，ウエスト・ニュートン→フラミンガムと，財政的基盤が不安定のため，つぎつぎと移転しなければならなかった。

レキシントンにつづいて，バリ，ブリッジウオーターにも師範学校が設立された。師範学校設立において，マサチューセッツ州は，主導的役割を果した。

マサチューセッツ州の師範学校設立の実験は，先ず，長い間，アカデミーによる教員養成を堅持してきたニューヨーク州に影響を与えた。ニューヨーク州は，1844 年 12 月 18 日，5 カ年間の実験として，オルバニーに師範学校を設立した。その初代校長になったのは，ペイジ（Page, Dauid P 1810 ～ 1848）であった。彼は，教育学の講義内容と教育実習の充実に力を入れ，教員養成の発展に大きな貢献をした。

1839 年に，マサチューセッツ州に 2 校，そして翌年に一校実験的に設置された師範学校にならって，ニューヨーク，コネチカット，ミシガン，ロー

ド・アイランド，ニュー・ジャージー，イリノイ，ペンシルヴァニア，ミネソタなどの州に，1840年代，1850年代になると，州立師範学校が設立された。その後も，師範学校を設立するところが多くなり，1889～1890年には，州立師範学校103校，市立58校，私立43校となる。

しかし，同じ州立師範学校と言っても，成立事情が異なったため，多様である。そのことに，先ず注目すべきであるが，公教育との関連から見れば，東部諸州の師範学校と西部諸州の師範学校とに，師範学校を内容的側面から見れば，「教育実習を媒介にした教授技術の教授を重視するレキシントン師範学校系と，アカデミックな教科を重視して教育実習を比較的軽視したブリッジウォータ師範学校系の師範学校とに分けられる。[12]

このような中で共通する部分もある。それは，一つは，初等学校教員を養成することを目的とする学校であること，二つは，州が維持管理する州立の学校であること，三つは，年齢男子満17才以上（ニューヨーク州では18才），女子満16才以上とし，すぐれた健康と学力と道徳的品性をもつことを入学資格とし，その選抜方法は各学校が行なう入学試験による場合と各学区の教育委員会が師範学校の定める基準にしたがって試験を実施したのち推薦する方法とに分けられる。四つは，修業年限を，1840年代1年，1850年代1年半，1860年代2年と，次第に延長されたが，約2年程度としたこと。五つは，授業料を無償（ニューヨークの場合，教科書も無償）としたが，その場合，州内の公立初等学校に，一定期間奉事する義務があった。六つは，初等学校の徹底的な復習→一層高度な（中等教育程度）学科の学習→教職に関する学習を学科課程の内容とする。七つは，実験学校を附設し，教育実習を重視することである。[14]

(注)

(1) 梅根悟監修 『世界教育史大系 17』 アメリカ教育史 I 講談社 昭和56年6月30日 154～155頁 （真野宮雄担当）。
(2) 同上書 35頁 （津布楽喜代治担当）。
(3) 同上書 92頁 （津布楽喜代治担当）。
(4) 城戸幡太郎編 『教育学辞典』 第一巻 岩波書店 昭和11年5月30日 6頁。
(5) 前掲書 『世界教育史大系 17』 296頁 （津布楽喜代治担当）。
(6) 同上書 298頁。
(7) 同上書 299頁。
(8) 同上書 295～296頁。三好信浩著 『教師教育の成立と発展』 東洋館 昭和47年2月20日 66～70頁。
(9) 前掲書 『教師教育の成立と発展』 136～137頁。
(10) 同上書 95～96頁。
(11) 同上書 101～102頁。
(12) 同上書 120～122頁。
(13) 前掲書 『世界教育史大系 17』 304～305頁 （津布楽喜代治担当）。

(六)伊沢修二の留学生活

前述のごとく，伊沢は，ブリッジウオーター師範学校へ留学先を変更しなければならなくなったのである。最初の選択は間違っていたが，ブリッジウオーター師範学校の選択は，正鵠を得たものと考える。と言うのは，一つは，ブリッジウオーター師範学校は，マサチューセッツ州が，1838年設立決定した三つの州立師範学校のうちの一つであることである。二つは，三つの師範学校のうち最後に設立されたとは言え，他の二つの師範学校が開設場所から移転したのに対し，ブリッジウオーター師範学校は，財政的基盤がしっかりしており，開設時から場所を変らなかったことである。三つは，伊沢が留学した頃の1875（明治8）年のブリッジウオーター師範学校は，第3代校長ボイデン（Boyden, A. G., 1827～1915）の人格と手腕とによって，当時のアメリカ合衆国の中でも代表的な師範学校の一つとなっていたことである。

そのブリッジウオーター師範学校の歴史を粗描

してみよう。ブリッジウオーター師範学校は，1840年9月9日，アメリカ合衆国第3番目の州立師範学校として，設立された。その初代校長に，ティリンガスト（Tillinghast, Nicholas ? ～1856）がマンの推薦により任命された。彼は，陸軍士官学校の出身で，陸軍大尉までなったが，退職し，陸軍士官学校のアカデミイの教師となったり，病気のため，そこを退職し，ボストンで学校を開いていた。その時，マンに見出され，校長就任を要請されたが，不承不承，受諾したのである。彼は，1853年7月まで，在職し，いろいろな困難があったにかかわらず，ブリッジウオーター師範学校の基礎をつくり，その名声を高める原動力となった。マサチューセッツ州の第2の州立バリ師範学校は，最初に設立されたレキシントン師範学校とは，開設告示を見ると，男女共学であったことと，入学年齢を男子17才以上，女子16才以上としたこと，署名した監査委員が異なったこと以外，同じであった。[1] したがって，ブリッジウオーター師範学校も，男女共学の師範学校であったので，バリ師範学校と同じであったと思われる。

ブリッジウオーター師範学校は，ティリンガストと28名の生徒とともに，1840年9月9日，開校された。校長ティリンガストは，軍人らしい性格をもち，小さなことでも，几帳面に正確をきしてやりぬくことを，他人に対してばかりでなく，自己に対してきびしく律することを強調したという。彼は，完全な小学校教師を養成しようとしたが，入学者の大部分の生徒は，前学期，後学期のうち前学期だけを履習して小学校教員となるものが多く，これでは，小学校教員養成といっても不十分であると考え，1845年9月，彼は，校長を辞職しようとした。これが認められなく，1846年5月，規則改正が行なわれ，1学期を14週をもって構成し，継続して3学期履修することとなった。[2]

ティリンガストは，これでも満足せず，修学年限を4年とし，「単に初等教科の復習ならびに教授技術の教授に限定してとらえる一連の立場とは異なり，師範学校教育の基底に学問性を据えるこのような認識を抱いていたものと」と，言われている。[3] 彼は，アカデミックな教科の教授に熱心であり，教育実習を重視しなかった。その表われか，1850年3月，附属学校（Model Shool）は廃止された。それは，伊沢修二が学んだ時もなく，1891年になって，やっと再興された。[4] ブリッジウオーター師範学校から26人の師範学校校長を輩出し，その火は，ロード・アイランド，メイン，コネチカット，ヴァーモント，ニュージャージー，イリノイ，ミズーリ，ミシシッピー，ミネソタ，カリフォルニアへ点火され，一つの潮流をつくった。この功績の多くは，初代校長ティリンガストに帰せられるべきである。[5]

初代校長ティリンガーストは，1853年6月28日，辞職し，その後任として，彼は，ブリッジウオーター綿繰り機工場のコンサルタント技師であるコナント（Conant Marshall, 1801～1873）を推薦した。コナントは，ティリンガーストとは異なったタイプの人間であり，学校に新風をもたらした。彼は，幼少の頃から，水車，風車，製材ノコギリなどに興味を抱いた。17才の時，彼は，建具職の親方となった。その後，地理学，算術，天文学に興味をもった。23才の時，公立学校の教師となり，星の運行を研究したり，計算の体系的な表をつくったり，高等数学の本を書いたり，1828年には，翌1829年度の暦をつくったり，それを1834年度までつづけた。1829年には，バーモント州のウッドストックで私立学校を創設した。そこで，5年間過した後，彼は，1834年ボストンに来て，ボイルストン・グラマ・スクール（the Boylston Grammer School）の教師となり，1845年まで，ここで教えた。健康上の理由で，ボストン上水道局の主任技師となったり，ニューハンプシャで鉄道のコンサルタント技師となったり，その後，1852年に，上述の綿繰り機工場の技師となっていたのである。[6] 以上の経歴で分るように，初代校長のティリンガーストとかなり違った経歴である。

コナントは，1853年8月から1860年7月まで，第2代校長として勤務する，彼が就任すると，学校の雰囲気が変わった。初代校長に比べると，厳格でなく，広い心の持主で，仕事や生活にゆとりがあった。彼の想像力は豊かで，熱中し易く，学生への影響力は強く，学生から彼の学識の広さが賞讃されている。そして，施設，設備および図書館の充実を図り，地理および生理学上のさし絵，地質学の標本などの教材・教具も充実された。[7] すなわち，彼の科学的知識を生かして，その側面からの充実を図った。その外，教育学の実践化を図ったのも，彼の校長時代の特徴であると言う。

彼の在任中，最も重要な改革の一つは，1854年のマサチューセッツ州の「定」に応じて，1855年に，ブリッジウオーター師範学校の規則を改正したことである。改正規則によると，入学資格は，男子17才以上，女子16才以上で，「徳性が優れていることの責任を持てる者の証明を有すること」であり，読み，綴り，訳釈（defining），算数，書

表（六—①）ブリッジウォーター師範学校の教育計画（1855年）

（A）午前の部

曜日	時間	初級	中級	上級
月曜・金曜	9：00— 9：15	祈禱		
	9：15—10：10	算術	算術	アメリカ史
	10：15—11：00	ラテン語Ⅰ	ラテン語Ⅱ	ラテン語Ⅲ
	11：15—12：00	代数学	代数学	合衆国政治組織及び憲法
火曜・木曜	9：00— 9：15	祈禱		
	9：15—10：30	幾何学	物理学	三角法及び光学
	10：45—12：00	算術	算術	天文学
水曜	8：30— 8：45	祈禱		
	8：45— 9：30	生理学	論理学	修辞学
	9：35—10：35	作文	作文	作文
	10：45—12：00	音楽	音楽	音楽
土曜	8：30— 8：45	祈禱		
	8：45— 9：30	生理学	論理学	修辞学
	9：35—10：35	代数学	代数学	地質学及び博物学
	10：45—11：40	文法	文法	文法
	11：45—12：00	道徳哲学及び義務	道徳哲学及び義務	道徳哲学及び義務

（B）午後の部

曜日	時間	初級	中級	上級
毎日	2：00—2：10	書き及び綴り		
月曜・木曜	2：10—3：00	読み	読み	簿記
	3：05—3：45	文法	文法	文法
	4：00—4：45	地理学	地理学	地理学ないしは工業製図
火曜・金曜	2：10—3：00	読み	読み	読み
	3：05—3：45	暗算	英語	教授論及び学校法
	4：00—4：45	地理学	地理学	測量術及び製図
毎日	4：45—5：00	総合学習		

＊ 上表は夏学期を示すもの。冬学期は30分ずつ繰り上げる。

注　小野次男著『アメリカ州立師範学校史—マサチューセッツ州を主とする史的展開』学芸図書　昭和62年10月30日　103頁より転載。

き，文法，地理などの入学試験が行なわれた。修業年限は1年半となり，学級編成は，初級，中級，上級の3クラスに編成された。それぞれの一週間の時間割は，表（六—①）のとおりである。[8]

この時間割からみた教育内容の特徴は，つぎの通りである。

一つは，前回の改正である1849年「定」のと比べると，地理，修辞学，作文，文法，歴史，教育法などが新設された科目であること。

二つは，音楽，製図，工業製図，政治学習，合衆国憲法学習を加えていることも，同じ州立であるウエストフィールド師範学校のそれと比べて，特徴の一つであること。[8]

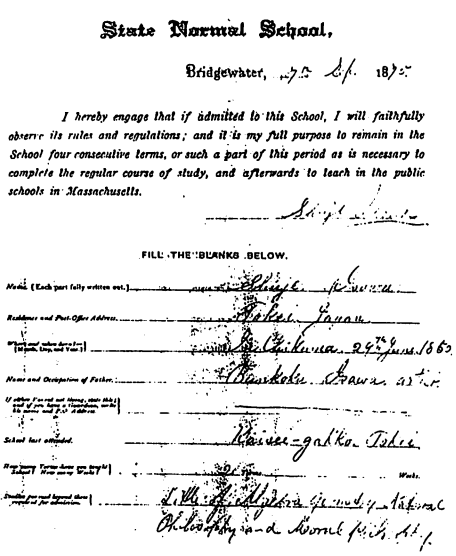
第2代校長コナントは，病気のため，1860年7月，辞職する。その後任として，ブリッジウオーター師範学校卒業生であるボイデン（Boyden Albert G.）が任命される。それから1906年までの46年間，校長を勤め，ブリッジウオーター師範

表（六―②）マサチューセッツ師範学校の1875～76年の入学者・在学者・卒業者

	入学者	在学者	卒業者	備考
ブリッジウォーター	96	230	46	1840・9開設，男女共学
フラミンガム	70	176	35	1839・7（レキシントン）→1844・9（ウエスト・ニュートン）→1853（フラミンガム），女子のみ
セーラム	122	293	67	1854・9開設，女子のみ
ウエストフィールド	75	177	45	1839・9（バリ）→1841・9（ウエストフィールド）男女共学
ウースター	76	167	—	1874・9開設
合計	439	1,043	193	

註　『州教育委員会セクレタリー報告書』による。

写真（六―①）伊沢修二の入学誓約書


State Normal School,

Bridgewater, 18

I hereby engage that if admitted to this School, I will faithfully observe its rules and regulations; and it is my full purpose to remain in the School four consecutive terms, or such a part of this period as is necessary to complete the regular course of study, and afterwards to teach in the public schools in Massachusetts.

FILL THE BLANKS BELOW.

学校をアメリカ合衆国を代表とする教員養成機関に発展させた。彼は，師範学校に入学する前の3年間の教職経験，卒業後の母校での6年半の助教師，イングリッシュ・ハイスクール校長などの教職経験を通して，校長となる実力をつけてきたのである。(9)

彼が校長に就任した頃は，マサチューセッツ州では，1852年に義務教育法が施行され，8才から14才にいたるすべての児童が毎年継続して12週間学校へ出席することを義務づけられたことや，ハイスクールの設置義務によりハイスクールの増大によって，初等・中等教育を担当する有資格教師の需要が増大してきた。そのため，入学志願者が多くなり，施設の拡大を図らなければならなかった。1861年には，これまでの校舎を増改築し，120名収容としたが，1870年には，191名の生徒が在学していた。そこで，1871年，増築し，2階校舎を3階校舎とし，200名収容したのである。入学者が多くなると，寄宿舎のことも問題となる。学校の周囲に学生を下宿させるためには適当なところがなく，1869年に59名の生徒と校長の家族を収容する寄宿舎が建設され，1873年には，148名を収容できる規模に増改築された。(10)

写真（六―②）伊沢修二留学中の校舎

Catalogue and Circular

OF THE

State Normal School,

AT BRIDGEWATER, MASS.

Eighty-Seventh Term.

Spring and Summer Term, 1876.

表（六―③）1876～1877年度の教授陳と担当教科

氏名	担当教科（1876）	担当教科（1877）	備考
ALBERT G.BOYDEN,A.M., Principal,	Psychology; Didactics; Book-keeping; Rhetoric.	昨年度の4教科の外，Zoologyを担当。	1860～1906年の間，校長を勤める。
GEORGE H. MARTIN	History and Civil Polity; Physics; English Literature; Botany; Zoology; Composition.	昨年度のZoologyに代って，Mineralogyを担当。	1864―79年の間，同校教師
FRANCIS H. KIRMAYER	Latin; French; German.	昨年度と同じ。	1870―1919年の間，同校教師
BARRET B. RUSSELL	Arithmetic; Chemistry; Gymnastics.	昨年度と同じ。	1871―9年の間，同校教師。
ELIZA B. WOODWARD	Drawing.	昨年度と同じ。	1857～1887年の間，同校教師
MARY H. LEONARD	Geography; Physiology; Astronomy; Composition.	昨年度に同じ。	1868～84年の間，同校教師
CLARA A. ARMES	Vocal Music; Algebra; Geometry.	昨年度に同じ。	
ISABELLE S. HORNE	Vocal Culture.	昨年度に同じ。	1875―1906年の間，同校教師
EDITH LEONARD	Composition; Grammar; English Literature	English Literatureに代って，Geometry, Physiologyを担当。	

注　1876年は，Catalogue and Circular of the State Normal School, at Bridgewater, Mass., Eighty-Seventh Term., Spring and Summer Term, 1876.　で作成し，1877年は，1877年度のそれで作成した。

施設・設備の整備・充実が図られるとともに，師範学校制度の大巾な改革も実施された。その一つは，1866年の改正であり，他の一つは，1869年の改正である。

前者の改正は，1866年1月9日の州教育委員会例会において可決されたもので，修業年限を2ヵ年に延長し，学年は，それぞれ20週で編成される二つの学期からなり，一日の授業は5時間を下らない週5日である。(11)

後者の改正は，1869年2月3日，州教育委員会が決定したもので，修業年限2年の高等課程を各師範学校に導入することである。これは，ハイスクール教師の需要に応ずるものであるが，これは，師範学校の地位向上に役立つものであった。(12)

校長ボイデンは，前者の修業年限を2ヵ年にす

表（六―④）春・夏学期の生徒数(1876・1877年)

	1876			1877		
	男	女	計	男	女	計
Junior Class	14	25	39	19	21	40
Ex-Junior Class	12	32	44	11	34	45
Sub-Senior Class	9	14	23	7	14	21
Senior Class	5	32	37	8	17	25
Advanced Course	9	15	24			
Partial Advanced Course						5
Four Years' Course				19	14	33

注　表（六―③）の資料で作成。

表（六―⑤）ブリッジウォーター師範学校の学科課程表（1875～1876）

	1875年秋・冬学期	Spring and Summer Term, 1876
第一学期	(1) 算術暗算及筆算始 (2) 幾何学始 (3) 化学 (4) 文法及英語解剖	1. Arithmetic, oral and written, begun. 2. Geometry, begun. 3. Chemistry. 4. Grammar, and Analysis of English Language.
第二学期	(1) 算術終　代数始 (2) 幾何学終地理学及歴史始 (3) 生理学及健康学 (4) 文法及文章解剖終 (5) 植物学及動物学一週二回	1. Arithmetic, completed; Algebra, begun. 2. Geometry, completed; Geography and History, begun. 3. Physiology and Hygiene. 4. Grammar and Analysis, completed. 5. Lessons twice a week in Botany and Zoology.
第三学期	(1) 代数終　記簿法 (2) 地理学及歴史終 (3) 物理学 (4) 修辞及英文学 (5) 金石及地質学一週二回	1. Algebra, completed; Book-Keeping. 2. Georaphy and History, completed. 3. Natural Philosophy. 4. Rhetoric and English Literature. 5. Lessons twice a week in Mineralogy and Geology.
第四学期	(1) 星学 (2) 心理学及修身学 附論理ノ理及術 (3) 教授ノ理及術 附教育ノ理及方法 学校整正及管理法 マスサチュセット州学制 (4) マスサチュセット州及合衆国民政学	1. Astronomy. 2. Mental and Moral Science including the Principles and Art of Reasoning. 3. Theory and Art of Teaching including:(1.)Principles and Methods of Education. (2.) School Organization and Government. (3.) School Laws of Massachusetts. (4.) The Civil Polity of Massachusetts and the United States.
	右科目ノ外四期間総ラ塗板上画并罫画唱歌綴字原由及義解読方附字音解剖及唱音演習及習字ニ注意スルヲ要ス拉丁及佛語ハ生徒ノ意ニ任セテ取捨スルヲ得然レトモ英学科ニ至テハ決テ輕忽ニ了過セサラン冂ヲ要ス 作文体操物体示教等ハ臨時学校長ノ意ニ任セ時限及方法ヲ定ヘシ学監局ノ特許ヲ以テ教員及上等生徒或ハ外来人タリトモ定則ノ学科或ハソレニ関係セル主意ニ付テ講議ヲナスコトヲ得ヘシ 教則ノ順序ハ学監ノ許可ヲ経テ臨時変更スルヲ得ヘシ	"In connection with the foregoing, constant and careful attention to be given throughout the course to Drawing and Delineations on the blackboad; Vocal Music; Spelling, with derivations and definitions; Reading, including analysis of sounds and vocal gymnastics; and Writing. "The Latin and French languages may be pursued as optional studies, but not to the neglect of the English course. "General exercises in Composition, Gymnastics, Object Lessons, etc., to be conducted in such a manner and at such times as the Principal shall deem best. "Lectures on the different branches pursued, and on related topics, to be given by getlemen from abroad, as the Board of Visitors shall direct, and also by the teachers and more advanced scholars. "The order of the studies in the course may be varied in special cases, with the approval of the Visitors."

注 1875年秋・冬学期の学科課程は，「米国ブリッヂウォートル師範学校一覧表」（『教育雑誌』第15号明治9年9月16日）により作成し，1876年のSpring and Summer Termのそれは，表（六―③）の資料より作成。

ることは1865年に決めており，後者の2年制の高等課程導入に対して積極的であり，他の師範学校に先駆けて，これらを導入したのである。[13]

伊沢修二が留学した1875年の時，マサチューセッツ州の師範学校は，表（六－②）のとおりであり，それぞれの師範学校の入学者・在学者・卒業者をみると，ブリッジウオーター師範学校は，セーラムにつづいて第2位の地位にある。しかし，ブリッジウオーター師範学校は，教職員のスタッフ，学科課程，施設，設備などから考えると，マサチューセッツ州の師範学校，いや，アメリカ師範学校の中で代表的なものであった。

伊沢修二は，1875年（明治8）年9月7日に，写真（六－①）の誓約書を出し，入学手続を済ました。先ず，この誓約書によると，「もし，この学校への入学が許可されたら，私は，その規律と規約を忠実に守り，4学期，すなわち正規の課程を修了するに必要な期間，この学校にとどまり，修了後，マサチューセッツ州の公立学校で教弁をとることを，ここに誓うということ」の誓約をしなければならなかった。その下欄に，名前，現住所，生年月日（出生地），父親の名前と職業，役人，最終学歴，教職歴，入学試験に必要な学科目以外で学んだ科目などを記入する。ここで注目すべきことは，彼の生年月日である。定説によると，彼の誕生日は，嘉永4（1851）年6月29日となっているが，[14] 誓約書の生年月日は，1850年6月29日となっている。すなわち，満1年の違いがある。これは，果してどうしたことか。

伊沢は，1875年9月7日入学の第86期生として入学するが，彼が入学した年のブリッジウオーター師範学校の状況を報告した『米国ブリッジウオートル師範学校一覧表』（大塚綏次郎譯）[15] が，『教育雑誌』（第15号　明治9年）に掲載されている。これは，Catalogue and Circular of the State Normal School at Bridgewater, Mass. Fall and Winter Term, 1876. を訳したものであろう。筆者は，1876年度，1877年度のそれのコピーを所持しているが，それらを通して，伊沢修二留学時代のブリッジウオーター師範学校の状況をみてみよう。

伊沢修二の通った頃の校舎は，写真（六－②）の通りである。そして，1876年度と1877年度の教授陣は，表（6－③）の通りである。教授陣をみると，校長を含めて9名である。そして，その多くが，複数の教科を担当し，10年以上，中には，校長をはじめ40数年も，ブリッジウオーター師範学校に在職している教師もいる。

生徒の入学資格は，男子17才以上，女子16才以上で，品行正しくして，学校の規則を遵守し，将来，マサチューセッツ州の公立学校教師となる保証ある者[16]で，読方（reading），綴字（spelling），習字（writing），算術（arithmetic），地理学（geography），合衆国史（the history of the United），英文典（english grammar）などの入学試験に合格した者が入学出来たのである。

伊沢修二が入学して一学期後の1876年の春・夏学期と1877年の春・夏学期の生徒数は，表（六－④）のとおりである。伊沢は，1876年の春・夏学期においては，Ex-Junior クラスに在籍し，1877年の春・夏学期においては，Sinior クラスに在籍しているが，この表から見ると，入学定員は，約40名で，在籍生徒は入学して1年を経た第3学期以降になると，減少し，男子生徒よりも女子生徒が多いことが目につく。しかし，ハイ・スクールの教師を養成する4年コースは，女子生徒より男子生徒が多いのが，1学期の生徒数だけだが，注目される。そして，創立から伊沢が入学して第2学期になる1876年の春・夏学期までの当師範学科の入学生数は2,310人であり，一定の課程を修了し，免許状と卒業證書を受了したものは，1,352人であった。[17]

師範学校設置の目的は，「専生徒ヲシテ州内ノ公立学校ヲ整正管理スルノ方法及教育法ヲ演習セシムルニアリ」とし，その目的を達成するためには，「第一本校所定ノ学科第二教授ノ方法ニ於テ充分学術ヲ研究セサルヘカラス」と，明記している。それでは，入学して学ぶ学科とは何か。それは，前述した1866年1月9日，州教育委員会が定めた教則に基ずいて定められたものであった。

この教則によって定められた1875年の秋・冬学期と1876年の春・夏学期の学科課程は，表（六－⑤）のとおりである。前者は，明治9年の文部省出版の『教育雑誌』（第15号）に掲載されたものである。後者は，1876年春・夏学期の生徒募集の広告ビラから抜粋したものである。前者の翻訳したものは，後者のものと，比較してみると，殆ど変らない。この課程は，小学校教員養成を目的とし，修業年限2ヵ年で，4期に分けられ，冬期を20週とし，一週5日で，1日5時間の課程である。1855年の大改革された表（六－①）の学科課程と比較すると，大きく改革された点は，修業年限が2ヵ年に延長されたと言うこととともに，つぎの点にある。

一つは，心理学が登場し，重視されていることである。そして，そのテキストとして，Sir Wil-

liam Hamilton の Inductive Reasoning, Mark Hopkin の Outline Study of Man, William T. Harris の Logical Outlines of Study が使用された。[18]

二つは，この心理学的観点から，教授の理および術（Theory and Art of Teaching）の講義も実施された。そして，心理学，教授学の両方の講義は校長のボイデン自らが行なっていることが注目される。

三つは，欄外のところに記してあるように，板書の仕方などが注意してあるのから判断すると，小学校教育との観点が強調されていることである。

その外，化学という教科が，新しく登場していることである。

上記の小学校教員養成を目的とする下級課程の外，ハイスクールの教員を養成する4年制の上級課程も設置された。この課程は，「下級ノ学科ヲ卒業シ拉丁佛独乙語高等数学其他高等学校ニ必要ナル学科ヲ教フル学校ノ教師タラント欲スル者ノ為ニ設ケ二年ヲ以テ期トス」（A supplemental course of study, occupying two years, is provided for the graduates of the shorter course who desire to prepare themselves for the higher department of teaching, which includes the Lation, French and German languages, the higher Mathematics, and the other branches required to be taught in the High Schools of the State.）[19] のである。

以上のように，ブリッジウオーター師範学校は，小学校教員を養成する下級課程とハイスクールの教員を養成する上級課程との二つの課程があった。伊沢は，下級課程を学んでのであったが，当校での『学業及練習ノ目的并方法』を，つぎのように定めている。それによると，「教育ノ理及方法其他種々ノ学科ヲ理解シ教授法ヲ熟練シ及全体ノ智力ヲ開発スル」ことを，ブリッジウオーター師範学校の目的とした。そのために，「仮令生徒各自ノ学業ハ上達シ得ルト雖自ラ学ヒ得タル所ノ学科ヲ人ニ教ヘ得ルニアラサレハ決シテ適実ナルモノトス」という考えの下に，「生徒輪流仮ニ教師トナリ同級生徒ニ各学科ヲ授ケ而シテ其生徒及ビ教師ノ批評ヲ受ク」るようなことをしたり，附属学校がなくても，タウンスクールを利用して，「卒業前ニ児童教育ノ経験ヲナサシメン為ニ一等級ノ生徒ハ初等学校ノ児童ニ物体示教ヲ授ケ児童ノ教育ニ注意シ且之ヲ思慮シ自己ノ思想ヲ発言スルノ慣習セシム」るようにしたりした。教科書の取り扱いについては，「之ヲ参考ノ用ニ供シ敢テ記臆セシムルヲ要セス又生徒ヲシテ字句ノ間ニ汲々タラシメス以テ思想ヲ研究セシムルヲ緊要トス」るのであった。生徒の本分として，「生徒タル者ハ教師ノ監督ヲ待タスシテ規則ヲ遵守シ己ヲ正フシ自ラ戒ムヘ」きものであり，「モシ学頭及副員ノ命ニ従ハサル者アレハ到底教師タルニ堪サル者ト看做ス」とし，そして，その本分を自分から守らせるようにすべきである。

授業時間中は，「教場房室ヲ論セス静粛ニシテ人ト交接スヘカラス」と定めたり，就寝の時間を午後10時と定め，少くとも7時間以上の睡眠とるべきで，勉強のためとは言え，常識を外れた夜更し，朝起きを禁止している。すなわち，「格外ニ早起勉強スル者ハ校則ヲ干犯ハルヲ以テ論ス」るのであった。出欠にも厳しく，「非常ノ事故アルニアラサレハ欠席或ハ遅刻スヘカラス」と定められ，「市外ニ出ント欲スル者ハ預メ学頭ノ免許ヲ受ケヘシ」とあるように，市外へ外出するにも，学校長の許可を必要とした。その外，日曜日には，自分の選んだ教会の礼拝に出席すること，毎日一時間は戸外で運動することなども，校則として定められている。

学年および学期は，学年を二期に分け，各期を20週とし，それぞれの期の中間に，1週間の休みを置いた。1876年から77年にかけて学年および学期の暦は，つぎの通りである。

「1876年 2月15日(火) 春期開業
4月19日(水) 一週間休暇始
6月29日(木) 春期卒業
6月30日(金) ブリッジウオーター師範学校の年次大会（会合）
9週間の休暇
9月5日(火) 秋期開業
感謝祭1週間休暇
1877年 1月23日(火) 秋期卒業
3週間休暇
2月13日(火) 春期開業」[20]

施設としては，「校内ニ肝要ナル書籍ヲ集メ参考及閲読ノ用ニ供シ生徒ニ日々看閲ヲ許ルス定則ノ学科ニ必要ノ書籍ハ一切之ヲ貸付」ける図書室あり「各種上等ノ器械ヲ備具ス」「鉱物及其他ノ見本ヲ陳列ス」るところの器械室あり，化学実験室あり，「上等ノ器械模型及描写ノ最美ナルモノヲ備ヘ画学ノ諸部ヲ教フルニ便ナラシメ且生徒ノ術ヲ学フニ供スル」ところの美術室などもあった。

その外，寄宿舎も設置されていた。その設置の動機は，教育的な理由というよりも，経済的な理

由からであった。師範学校の周囲には，なかなか下宿が見つからず，見つかったとしても，高い下宿料を支払わねばならなかったのである。前述したように，したがって，1869年に州費で寄宿舎が設置された。その寄宿舎の様子は，つぎのようであったと言う。

「学校の附帯施設として建てられた寄宿舎は感じのよい広い建物で，奥行と間口とがそれぞれ40フィートと50フィートにある地下1階，地上3階とでできていた。地下に洗濯場と貯蔵所が設けられ，地上1階には家族用の部屋（校長の家族が使用……筆者注）とパーラー，食堂，調理室などが，そして2階と3階とには，高さ10フィート奥行10フィート間口15フィートとに区切られた生徒用の部屋が29室用意された。生徒用の各部屋には二つのクローゼットと家具とが取り付けられカーペットが敷きつめられ，スティーム暖房と完全な換気とが施されていた。この生徒用の部屋は一部屋2人で，女子生徒だけの使用に供した。したがって男子生徒は寄宿舎で食事をすることはできたが，居室は民家に求めた。[10]」

1869年に新築された寄宿舎も，1873年には，58名から145名収容できる寄宿舎に増築された。1876年の秋・冬学期の生徒募集公告の中では，寄宿舎についてつぎのように記している。

「寄宿生徒ノ為ニ本州政府本校内ニ於テ甚便宜ニシテ且爽快ナル寄宿舎ヲ設立シタリ二生徒一室ヲ領スヘキトシ各室小暗房二ヲ附シ地氈ヲ舗キ臥褥及枕其他ノ器具ヲ備ヘ蒸気ヲ以テ室ヲ煖メ瓦斯燈ヲ點シ外気ノ流通ヲ便ニス而シテ家屋ノ一方翼ヲ以テ男生徒ノ居所トナス

学頭ハ生徒ト共ニ寄宿シ之ヲ管督ス寄宿生ヲシテ此舎ヲ私家ト同一ノ思想ヲナサシムヘキ方法ニ於テハ敢テ其労ヲ厭ハサルヘシ而シテソノ地位タルヤ景色秀美ニシテ各室亦極テ爽快ナリ」

増築されると，男子生徒も入舎出来，男子は一期80ドル，女子は一期75ドル，「飲食薪炭膏火洗濯費并寄宿舎及器具修繕ノ費用」として支払わねばならなかった。そして，寄宿舎は全寮制ではなく，「鉄道ニ接近ナル市邑ニ居住スル生徒通学セント欲スル者ハ低價ヲ以テ一期間ノ汽車票ヲ買ヲ得ヘシ」とあるように，通学も認めた。

授業料は，「本州ノ学校ニ於テ教師タルヘキ約束ニ同意スル者」には，無料であり，そうでない者は，「相当ノ授業料ヲ課す」のである。そして，学期の初には，「各生徒ヲシテ束脩金二弗ヲ納メ以テ臨時ノ費用ニ供ス」のであり，学資の乏しい者には，一部，資金の援助がなされた。

以上，1876～77年頃のブリッジウオーター師範学校の状況を種々の側面から考察してきたのであるが，「各期末各学科ニ就テ口筆両様ノ試験ヲナス満足ニ之ヲ遂ケシ者ハ逐次ニ進級シ定則ノ学科ヲ実践シ總テ試験ヲ道ケタル者ニハ免状ヲ受興ス」る。

1875年9月7日に入学し，1877年7月3日，伊沢は，めでたく，ブリッジウオーター師範学校を卒業した。彼は，感受性豊かな若い時代であり，好奇心の旺盛で努力家であったので，在学中の2年の間，いろいろと刺激があり，学び，無意識の中に影響を受けた。自伝である『楽石自傳教界周遊前記』を通して，それを見てみよう。

先ず，彼にショックを与えたことは，男女共学であったと，彼は，つぎのように述べている。

「其中の最も重なるものは男女合併教育であって，該校の在学中男子は十八歳から二十三，四歳位まで，女子は十六，七歳から二十歳前後で，所謂青春妙齢の男女である。然るにこれを集めて，同教室で教授するのみでなく，寄宿舎の如きも間隔こそありたれ，ヤハリ同一建物中にあってそれで校長以下教員も男女生徒も皆平気でをり，然かも何等風紀上の汚點の無いといふことは，純東洋風の教育に育った余の目に，実に甚だしく奇異に感せられたのであって，当時の奇異の感は今日尚ほその印象が消え去らぬ程深刻であった。[21]」

すなわち，男女七才にして席を同じくせずという儒教道徳で育った伊沢にとって，男女が，同じ教室で，同じ学習をし，同じ寄宿舎で，同じ生活をするということは，想像だに出来なかったことが，現実に，行なわれていたことは，かなりのショックであったのであろう。留学後，37年間経た明治末年になっても，その印象が深く残っていると言うのである。

つぎに学んだことは，学科課程の学習を通してである。彼は，「此師範学校に入り，其学科の全部を学習するは勿論，彼我の異る點をも能く研究して，我国の普通教育に貢献しようといふ精神であったからして，誠実に勉学した結果，学科の成績に於ては敢へて彼地の生徒には劣らず，常に中以上の席次を占めてをった[22]」のである。しかし，ここにおいて困ったことが二つあったと言う。一つは，英語が十分できなかったことである。特に，その発音に困ったことである。彼は，その克服の方法を模索し，電話機の発明者であるグラハム・

ベル（Bell, Alexander Graham 1847～1922）を知り，彼のところを訪問し，彼の視話法の教えを受け，発音の矯正により，「卒業当時は普通の談話に差し支へぬやうになり，然かも其の後に於ては，視話法を応用して仕事をしてをるやうになった。」のである。すなわち，帰国後，「視話法を学習したといふことであって，余は此法に依って唖子に発音せしめることも出来た。又台湾在勤当時，彼の新附の人民に国語を傳へるにも此法に依った，のみならず今日余は，此法の原理を応用して吃音矯正法を組み立て，国語正音法を創開し，学術及社会事業に貢献することが出来る」[24]ようになったということである。二つは，音楽が全然出来なかったことである。ある時，校長から『今後唱歌を免除してやるから安心せよ』[23]と言われたが，彼は，これを喜ぶどころか，例の負けじ魂で，それを克服するため，ボストン在住の音楽教育家メーソンを訪問し，教えをこうた。彼は，快よく承諾し，彼の指導によって，卒業の時分には，普通に出来るようになったということである。そして，帰国後，音楽教育の普及に盡すのであった。

三つは，校長ボイデンの生活態度を通して，理想的教育家の在り方を学んだことである。伊沢によると，彼は，「訓育家で別に著述などは見無かったが，其感化訓育といふものは，有名であった。」[25]と言う。校長は家族とともに寄宿生と一緒の建物に住み，「食事の時には校長が家族を引き連れ先に立って食堂に入り，続いて二三百人が同じ食堂に入りて坐し，食堂の祈祷があって食事に取りかゝるのであるが，誠に静粛で絶えて紛雑の態は無い，と云って又決して窮屈の感などを起さぬ誠に所謂和気靄々たるもので，一大家族たると殆んど異る所が無かった。」[26]と言う。そして，その規則は，つぎの三つであったと言う。

一，食事の時間を確守すること。
二，散歩の時間を確守すること。
三，黙学の時間を確守すること。
（黙学は夜二時間宛であった）[27]

規則は，以上の三つであったが，しかしながら，「規則は厳正に守らねばならぬのであって，毎週金曜日に当り，若し前一週間中に規則を破った事が有れば一定の印刷紙中に記入して，これを校長に提出せねばならぬ，而して此報告は校長独がこれを視るのである」が，注意しても，何度も同じ間違いをすると，退学の命令が出される。その命令は，「他の者に解らぬ様秘密に行」われると言う。その様な態度で校長は生徒指導を行なうので，生徒への感化力は偉大なもので，伊沢をして，「誠に恐入ったものであった。」と言わしめている。そして，「其師範教育が実に能く教育の真理を実際に行って行き，教授法から訓育まで，事々物々に教育の真理が閃いてをった。これが亦実に我々の，帰国後に於ける努力の目的となった。」[28]と言うことである。

四つは，同級生を通じて，彼の人生観が変えられたことである。すなわち，東洋では，実年齢より年をとって見られること，所謂，「余も留学以前には老成人を気取り老成的態度を採った」のであるが，ところが，「米国などに行って見ると，二十何歳などゝいふのはまだ丸でボーイである，毬を投げたり散歩したり，氷滑をしたり，我国の七八歳の子供も同様の生活をしてをる」[29]のである。したがって，伊沢は，老成主義に疑問を抱き，その生き方を変更したと言う。

「其所で余は従来の老成主義に疑を抱いた，人生は如何に長命でも七八十年のもので，百年といふのは極めて希有である。然るを未だ三十歳にもならぬに，既に年寄の精神となっては，到底此生を充分價あるものとすることは出来ぬ，若々しく面白く暮したが可いと決心し，それから断然同生徒の仲間に這入って子供遊をした，勿論始の間はドウも気耻しかったが，相手の者は寧ろ此方を当然と思ふからして，格別の困難は無かった。此くの如く心を改めて，元気克く仕事をしようといふ心持になったのは，これまた此留学中に得た－大幸福」[29]

伊沢は，ブリッジウオーター師範学校在学中，以上のようなことを学んだと，語っているが，その外にも，いろいろなカルチャーショックを受けたと推察される。

前述したように，伊沢は，1877（明治10）年7月3日，ブリッジウオーター師範学校を卒業したのであるが，伊沢は，つぎのような理由で留学継続の願を文部省に出した。

「当時余の考では，元来自分が派遣せられたのは，師範学科取調といふにある，然るに師範学科といふものは普通教育の全般に亘ってその基礎たるものである，勿論今日までの学修で一ト通りそれを修めたと云へぬことは無い，けれ共大学教育を知らねば，普通教育の聯絡発達して行く工合が解らぬ，然らば師範学科が充分に解ったと云ひ難い，故に卒業後は大学教育の状況をも，ザット一ト通り調べて帰らうと志してをった。米国には数十個の大学校が有るのであるが，其の頃最も進歩発達してをったのは，今

日も有名な彼のハーバート大学である。依って更らに其旨を述べて文部省の許可を得，同年十月ハーバート大学に這入った。[30]

ハーバード大学は，アメリカ合衆国の大学の中で最古の大学であり，当時，法学部には，日本からの留学生がいたが，彼は「国の富強を図るには科学的思想，科学的知識が最も大切である，然らば師範教育としても，国民の科学思想を発達せしめることは，最も緊要の時務といはねばならぬ。」と理由で，理科大学へ入学したのである。しかしながら，彼は，「師範学科取調の為に行ったのであったからして，悠々科学を修めることは出来ず，物理学，科学，金石学，生物学，植物学等凡べての科学科に渉り，一ト通り実験もし講義も聴いた，殊に地質学は余にとって頗る興味深きものであったからして，後にこれを主として研究した。」[31]

彼は，ハーバード大学でも，あくことない好奇心と情熱で勉学に勤んでいたが，父文谷の危篤の報に接し，予定より2ヵ月早い，1878年5月21日，帰国した。帰国後，彼は八面六臂の大活躍をするのであった。

(注)

(1) 三好信浩著 『教師教育の成立と発展』 東洋館　昭和47年2月20日　109頁。
(2) 小野次男著 『アメリカ州立師範学校史』学芸図書　昭和62年10月30日　285頁。
(3) 同上書　286頁。
(4) 同上書　289頁。
(5) Harper, C. A., A Century of Public Teacher Education, 1939, PP 27～28.
(6) Boyden Arthur C., The History of Bridgewater Normal School 1933, PP 30～31.
(7) Ibid., P. 32.
(8) 前掲書 『アメリカ州立師範学校史』 103～104頁。
(9) John F. OHLES' ed. Biographical Dictionary of American Educators vol. 1 1978 にによると，彼は，1827年2月5日にマサチューセッツ州のサウスワーポールに生まれ，1915年5月31日に没する。鍛冶屋の父を手伝いながら，彼は，デイストリックト・スクール（district schools）に通い，小さい時に，教師になることを決意した。正式の教育を受けることなしに，彼は，ブリッジウオーター師範学校に入学する前に，冬期学校で，3年間，教えた。ブリッジウオーター師範学校を1849年卒業するが，彼はマサチューセッツ州のサーレムとボストンで教職活動をした1853年から1857年までの間を除いてブリッジウオーター師範学校長のアシスタントとして勤めた。すなわち，1850年から1853年の間は，初代校長ティリンガースト，1857年から1860年の間には，二代校長コナントの下で，働いたのである。(P. 157)
(10) 前掲書 『アメリカ州立師範学校史』154～155頁。
(11) 同上書　130～131頁。
(12) 同上書　174頁。
(13) 同上書　290頁。
(14) 『楽石自傳教界周遊前記』（2頁）『伊沢修二選集』(1060頁）などである。
(15) 『教育雑誌』 第15号　明治9年9月16日　21～35頁。
(16) ただし，「他州ノ学校若クハ州内私立学校ノ教師タラント欲スル者ハ一期間束脩金十五弗ヲ収納シ入学ヲ許ス」である。伊沢修二も，この但書によって，入学を許可されたのであろう。
(17) Catalogue and Circular of the State Normal School at Bridgewater, Mass., Eighty Seventh Term, Spring and Summer Term, 1876. P. 7.
(18) Boyden Arthur C., op. cit., P. 37.
(19) 注(17)の資料の8頁。
(20) 注(15)と注(17)の資料により作成。
(21) 伊澤修二君還暦祝賀会 『楽石自傳教界周遊前記』 明治45年5月9日　26頁。
(22) 同上書　27頁。
(23) 同上書　28頁。

(24) 同上書 38頁。
(25) 同上書 32頁。
(26) 同上書 33～34頁。
(27) 同上書 33頁。
(28) 同上書 35頁。
(29) 同上書 31頁。
(30) 同上書 39頁。
(31) 同上書 40頁。